

大学生活への適応状況に関連する要因についての調査

西垣 順子・小林 正信^{#1)}

教育システム研究開発センター

内線 7135 jnishig@gipac.shinshu-u.ac.jp

要 旨

1年生から3年生までの学生の、大学生活への適応状況について調査し、それに影響を与えていると考えられる要因について検討した。登校してきている学生のうち、2割弱の学生が不適応状態を感じていることがわかった。不適応状態である学生の特徴として、所属する集団に対する適応感が弱いこと、自分の世界に閉じこもる傾向があること、必要な自己主張が出来ないこと、希望のある将来展望を持っていないこと、といった特徴が見られた。自分自身への信頼感や独りでいることに堪えることに関しては、適応している学生との間に違いがなく、対人関係が不適応の大きな原因であることが伺えた。また、社会や歴史、政治に対する関心は、適応している学生と不適応の学生で違いがなかったが、不適応状況にいる学生はそれらに対する関心が、大学での学業に対するやりがいにつながっていないことが示唆された。

キーワード

集団への適応、閉じこもり傾向、自己主張、将来展望、大学生活への適応

1. 調査の経緯

学生への教育サービスは大学運営の中核であり、適切な教育サービスの提供のために、現代の大学生の人格発達や修学姿勢の実情を把握することは不可欠である。保健管理センターを訪れる学生の実態などから、小林・西垣・相澤・橋本(2003)は、ゼミなどの少人数集団への適応状況、大学生としての自覚、および現実的な目標の達成の3つの側面について、学生の実態を調査する必要性を指摘している。この指摘を受けて、西垣・小林・相澤・橋本(2003)では、これらの3点を測定するための質問紙を作成した。

上記の3点は保健管理センターに相談を訪れる学生の分析から見出された視点であるが、一般の学生の現状は、必ずしも十分に把握されていない。そこで本研究は、西垣ら(2003)で作成された質問紙を使用して調査を実施し、信州大学の学生の実態を明らかにすることを目的とする。西垣ら(2003)で作成された質問紙は「少人数集団への適応」と「大学生としての自覚と現実的な目標達成」の2つであった。そのため本稿では、それぞれの質問紙調査の結果について報告し、学生の大学生活への適応状況に影響する人格発達上の問題、及び社会的な問題について考察する。

^{#1)} 現所属：虹の村診療所

2. 調査1 少人数集団への適応状況について

2.1 調査目的

高等学校までの公教育機関とは異なり、大学にはホームルームというものが存在しない。授業ごとに担当教員も、一緒に授業を受ける「級友」も変化する。これは友達を作りにくい環境であるが、その一方で誰からも自分の領域を侵害されないで大学生活を送ることのできる環境でもある。学年が進み、ゼミナールや研究室などの少人数集団に所属するようになると、そこで必然的に発生する複雑な人間関係に適応できないという訴えを持って保健管理センターを訪れる学生もいる。本調査では本学学生の3人以上の少人数集団への適応状況について調査する。

2.2 調査方法

回答者

回答数は、1年生98人、2年生41人、3年生30人であった。男女別には、男性84人、女性85人であった。学部別の人数は、章末の資料1を参照。回収率は18%であった。

質問項目

少人数集団への適応状況 項目は全部で41項目あり、すべて「あてはまらない」「どちらかというにあてはまらない」「どちらともいえない」「どちらかというにあてはまる」「あてはまる」の5件法で回答を求めた。項目リストは結果の項の表3を参照。

大学生活への適応状況 回答者自身の現在の状況について、「登校し、大学に良好な適応をしている」「登校しているが、大学には不適応状態である」「登校してない」の3つから選択してもらった。

調査実施手続き

2002年10月～11月に、調査用紙をランダムに抽出した1,000人の学生の自宅へ郵送し、回答を学務係まで持参してもらった。

2.3 結果と考察

2.3.1 大学への適応状況について

大学への適応状況を問うた質問への回答の度数分布について、学年別と性別のクロス集計を表1と表2に示した。登校している学生のうち、2割弱が不適応を感じている。

表1 学年別の適応状況 (人)

学年	適応	不適応 (登校)	不適応 (不登校)	合計
1	77 (78.6)	20 (20.4)	1 (1.0)	98 (100)
2	34 (82.9)	7 (17.1)	0 (0)	41 (100)
3	25 (83.3)	5 (16.7)	0 (0)	30 (100)
合計	136 (80.5)	32 (18.9)	1 (0.6)	169 (100)

() 内は学年ごとの%

表2 適応状況と性別のクロス集計表

性別	適応	不適応 (登校)	不適応 (不登校)	合計
女性	73 (85.9)	11 (12.9)	1 (1.2)	85 (100)
男性	63 (75)	21 (25)	0 (0)	84 (100)
合計	136 (80.5)	32 (18.9)	1 (0.6)	169 (100)

() 内は学年ごとの%

表1と表2のそれぞれについて、カイ二乗検定を行ったが、いずれについても度数の有意な偏りは見られなかった(学年に関して、 $\chi^2=1.10$, $df=4$, n.s. 性別に関して $\chi^2=4.85$, $df=2$, n.s.)。

2.3.2 大学への適応状況と少人数集団への適応調査質問紙への回答の関連

少人数集団への適応状況のうち、どの側面に関する不適応傾向が、大学生生活全体への不適応に関わるのかを調べるため、大学生生活に適応していると回答した被験者と、不適応状態であると回答した被験者に群分けした。その上で、不適応群の学生は少人数集団への適応状況質問紙への回答で不適応傾向が高いかどうかを検討した。表3に適応群別の平均値と標準偏差を示した。また各項目に対する平均値について、対応のないt検定を行い、結果も示した。

所属集団への適応に関する項目では、すべての項目の不適応群の平均点が適応群よりも有意に低く、所属集団に適応していなかった。さらに、「閉じこもり」に関する項目では、4項目中3項目で不適応群の平均点が適応群よりも有意に高く、閉じこもり傾向を示していた。

その一方で、「自分自身への信頼感」「期待にこたえられなかった場合への対処」に関する項目では適応群と不適応群で平均点に違いが見られなかった。

表3 大学生生活適応群と不適応群の各項目に対する平均値の比較 (* * * p < .01, * * p < .05)

		適応状況	人数	平均値	標準偏差	t検定
<二者関係への依存と固執>						
問19	親しい友人や恋人に依存し、相手が思うように応じてくれないことに不満を懐いてイライラする傾向がある	適応	136	2.78	1.26	*
		不適応	32	3.41	1.32	
問23	親友や恋人には、いついかなるときにも自分に対してだけ、注意を向けていて欲しいと思う	適応	136	2.62	1.27	n.s.
		不適応	32	2.81	1.45	
問41	親しい友人や恋人と二人で過ごしているときに、他の人がやってくるのを好まない	適応	136	3.18	1.20	**
		不適応	32	3.84	1.44	
問1	二人より三人以上の複数で行動した方が楽しいと感じる	適応	136	3.24	1.16	n.s.
		不適応	32	2.84	1.27	
問16	比較的多くの人とだんらんを楽しむより、親しい友人や家族の誰か一人とだけ話をするほうが好きだ	適応	136	3.21	1.25	**
		不適応	32	4.00	1.14	
<閉じこもり, 現実逃避>						
問27	自分の部屋に一人で閉じこもって、空想の世界にひたって何時間も過ごしてしまうことがある	適応	136	2.19	1.31	**
		不適応	32	3.03	1.58	

問34	うまくいかないことがあると、自分の世界に閉じこもってしまう	適応	136	2.37	1.13	n.s.
		不適応	32	3.56	1.29	
問2	自分がこういう人間であればなあ、いつまでも長い間、空想することがある	適応	136	2.96	1.33	**
		不適応	32	3.81	1.31	
問14	自分のことを考え出すと、それ以外のことに集中できなくなる	適応	136	2.63	1.17	*
		不適応	32	3.13	1.24	

<所属集団への適応>

問21	そこに所属することで充実感や安心感が得られ、またその発展のために寄与したいと思う集団を持っている	適応	136	3.70	1.22	*
		不適応	32	3.09	1.40	
問31	所属している集団のなかで与えられた役割を、責任をもって遂行できている	適応	136	3.74	0.85	**
		不適応	32	2.97	1.20	
問29	所属している集団のなかで、自分の意見を心おきなく主張できる	適応	136	3.40	1.04	**
		不適応	32	2.69	1.31	

<健康的な他者依存、信頼>

問39	心からリラックスして、親しい友達と過ごす時間を楽しめる	適応	136	4.25	0.91	n.s.
		不適応	32	3.41	1.43	
問30	自分自身を見失わずに、親密に付き合うことのできる友人や知人、または恋人がいる	適応	136	4.32	0.87	*
		不適応	32	3.66	1.52	
問25	周囲の人々に関心を持ち、配慮し、理解を深めている	適応	136	3.68	0.88	n.s.
		不適応	32	3.38	1.21	
問17	悩みごとなど、何でも話せる親しい同性の友人がいる	適応	136	4.15	1.13	*
		不適応	32	3.44	1.52	
問13	節度をもった付き合いができる異性の友人がいる	適応	136	3.71	1.41	n.s.
		不適応	32	3.31	1.60	
問5	家族のことに関心を持ち、配慮し、理解を深めている	適応	136	3.98	0.98	n.s.
		不適応	32	3.81	0.82	
問20	親に対する礼節を保ちながら、安心して大学生生活のことなどを語ることができる	適応	136	4.06	0.95	**
		不適応	32	3.25	1.24	

<他者への適切な自己表明>

問4	こんなことを言ったら相手に嫌われるという心配があっても、言うべきことは言う勇気がある	適応	136	3.01	1.10	n.s.
		不適応	32	2.84	1.32	
問24	相手に気を配りながらも、自分の言いたいことをいうことができる	適応	136	3.56	1.00	*
		不適応	32	3.06	1.27	
問33	自分の納得のいくまで相手と話し合うようにしている	適応	136	3.17	1.02	**
		不適応	32	2.59	1.21	
問9	疑問を感じたら、それを堂々といえる	適応	136	3.26	1.00	**
		不適応	32	2.59	1.24	
問37	自分の定めた目標を達成するために必要な場合には、世間体や見栄をにしばられないようにつとめ、時にはそれらを捨てることもできる	適応	136	3.35	1.06	n.s.
		不適応	32	2.94	1.27	

<被評価意識・対人関係>

問6	人から何か言われぬか、変な目で見られぬかと気にしている	適応	136	3.78	1.07	n.s.
		不適応	32	4.06	1.24	
問10	人に対して、自分のイメージを悪くしないかと恐れている	適応	136	3.55	1.06	n.s.
		不適応	32	3.75	1.02	
問15	自分が他人の目にどう映るかを意識すると、身動きできなくなる	適応	136	2.41	1.12	**
		不適応	32	3.19	1.31	

問26	他人に自分の良いイメージだけを印象づけようとしている	適応	136	2.85	1.02	n.s.
		不適応	32	3.28	1.25	
問28	無理して人に合わせようとしてきゅうくつな思いをしている	適応	136	2.58	1.09	**
		不適応	32	3.38	1.36	
問38	自分が他人より劣っているか優れているかを気にしている	適応	136	3.35	1.10	**
		不適応	32	4.00	1.05	
<自分自身への信頼感>						
問32	自分の言うことや考えることを、完全に受け入れてくれる人物がいたらいいのに、思うことがある	適応	136	3.15	1.32	n.s.
		不適応	32	3.53	1.41	
問22	1人でずず時間を楽しむことができる	適応	136	4.32	0.96	n.s.
		不適応	32	4.03	1.20	
問8	誰かから厳しい意見を言われても、混乱することなく聞くことができる	適応	136	3.02	1.20	n.s.
		不適応	32	2.56	1.37	
問11	自分自身の生き方や価値観について、真剣に自問することができる	適応	136	3.79	1.12	n.s.
		不適応	32	3.56	1.22	
問40	自分の内面に感じるものを言葉にして表現する何らかの努力（語る／書くなど）を、これまでにしてきた	適応	136	3.40	1.31	n.s.
		不適応	32	3.31	1.33	
<期待に応えられなかった場合への対処>						
問7	期待されていた目標が達成できなかった場合、落ち込んでしまって何も手につかなくなる	適応	136	2.71	1.17	*
		不適応	32	3.31	1.28	
問35	期待されていた目標が達成できなかった場合にも、目標設定や手段の選択に問題がなかったかを冷静に点検できる	適応	136	3.29	0.96	n.s.
		不適応	32	3.06	1.16	
問18	周囲の期待に応えられずに失敗した場合、他の世界に逃げていってしまいたくなる	適応	136	2.84	1.22	n.s.
		不適応	32	4.09	1.09	
<基本的信頼感>						
問36	私は自分自身を十分に信頼できると感じる	適応	136	3.04	1.19	*
		不適応	32	2.47	1.39	
問12	親しい人の些細な言動がきっかけで、その人から見捨てられたのではないかと心配になることがある	適応	136	3.28	1.29	n.s.
		不適応	32	4.19	0.86	
問3	人生に対して、不信感を感じることもある	適応	136	3.04	1.27	*
		不適応	32	3.59	1.27	

「他者への適切な自己表明」「被評価意識・対人関係」では、適応群と不適応群で平均値に違いが見られる項目と見られない項目が混在している。しかし、項目の内容を見ると、不適応群は言うべきことを本当に言えているかというような、実際の行動に関する項目の得点が適応群よりも有意に低い傾向がある。また被評価意識については、他者にどのようなイメージをもたれているかといった漠然とした被評価意識では群間差がないが、不適応群は他者より劣っているか優れているかを強く意識しているようである。

自分自身を見失うことなく適応的な対人関係を維持していくために、自分自身への信頼感には非常に重要な要素であると考えられる。しかし、本研究の結果では、自分自身への信頼感には適応群と不適応群で違いが見られなかった。それに対して、集団への適応や閉じこもり傾向では両群に違いが見られていた。

これらのことから、大学生活に不適応を感じている学生の特徴として、ひとりであること

にはそれほどの不安感を感じないが、所属する集団に対する適応感が弱いことが挙げられる。そしてその背景として、自分の意見を実際の場面では他者に言えないこと、優劣に関する他者からの評価を気にしていることがあると考えられる。

ただし、これらの要因の因果関係については本調査のデータで直接確認できているわけではないので、解釈には慎重でなければならない。

3. 調査 2 大学生としての自覚と現実的な目標達成について

3.1 調査目的

大学生が人格発達上達成すべき課題として、卒業後の進路を含む将来展望を持つことがある。その将来展望は、非現実的な夢であってはならず、また高等教育を教授するものとして社会的な使命感を意識したものであることが望ましい。本調査では、アイデンティティ確立に向けての内省的な態度や努力、現実的な目標の追求、大学生としての社会的自覚などについて調査し、大学生活への適応状況との関連について考察する。

3.2 調査方法

回答者 回答数は、1年生89人、2年生33人、3年生30人であった。男女別には、男性89人、女性63人であった。学部別の人数は、章末の資料1を参照。回収率は15%であった。

質問項目

大学生としての自覚と現実的対応についての調査 項目は全部で37項目あり、すべて「あてはまらない」「どちらかというにあてはまらない」「どちらともいえない」「どちらかというにあてはまる」「あてはまる」の5件法で回答を求めた。項目リストは結果の項の表6を参照。

大学生活への適応状況 調査1と同様。

調査実施手続き 調査1と同様。

3.3 結果と考察

3.3.1 大学への適応状況について

大学への適応状況を問うた質問への回答の度数分布について、学年別と性別のクロス集計を表4と表5に示した。

表4 学年別の適応状況 (人)

学年	適応	不適応 (登校)	合計
1	75 (84.3)	14 (15.7)	89 (100)
2	27 (81.8)	6 (18.2)	33 (100)
3	26 (86.7)	4 (13.3)	30 (100)
合計	128 (84.2)	24 (15.8)	152 (100)

() 内は学年ごとの%

表5 性別の適応状況（人）

性別	適応	不適応（登校）	合計
女性	57 (90.5)	6 (9.5)	63 (100)
男性	71 (79.8)	18 (20.2)	89 (100)
合計	128 (84.2)	24 (15.8)	152 (100)

() 内は学年ごとの%

表4と表5のそれぞれについて、カイ二乗検定を行ったが、いずれについても度数の有意な偏りは見られなかった。(学年に関して、 $\chi^2=0.28$, $df=2$, n.s. 性別に関して $\chi^2=3.18$, $df=1$, n.s.)

3.3.2 大学への適応状況と「大学生としての自覚と現実的対応質問紙」への回答の関連

大学生としての自覚と現実的対応に関する尺度のどの側面に関する不適応傾向が、大学生生活全体への不適応に関わるのかを調べるため、大学生生活に適応していると回答した被験者と、不適応状態であると回答した被験者に群分けした。表6に適応群別の平均値と標準偏差を示した。また各項目に対する平均値について対応のないt検定を行い、その結果も示した。

不適応群の閉じこもり傾向が適応群よりも高いのは、調査1の結果と同様であった。

不適応群は適応群に比べて、時間的展望のうち将来展望と過去受容の平均点が低く、特に将来に対して希望を持っておらず、過去を拒否する（思い出したくないなど）傾向がみられた。

歴史、文化、政治、環境への関心そのものは、両群で平均値に違いがないが、不適応群はその関心が地域社会の一員としての自分自身への責任感や大学での学業に対するやりがいにつながっていない傾向が見られていた。

以上のような違いはあったが、他者との関係よりも、自分自身のアイデンティティに関する質問項目をそろえた調査2は、調査1とは異なり、あまり一貫した群差は見られない傾向にあった。

表6 大学生生活適応群と不適応群の各項目に対する平均値の比較 (**…p <.01, *…p <.05)

	適応状況	人数	平均値	標準偏差	t 検定
＜アイデンティティを確立するための内省的態度＞					
問1 自分自身の生き方や価値観について、真剣に自問している	適応	128	3.89	0.96	n.s.
	不適応	24	3.75	1.33	
問10 将来の進路について、必要なことをじっくりと考えている	適応	128	3.77	1.08	n.s.
	不適応	24	5.13	8.58	
問15 自分がどんな人間なのか、何をしたいのかを真剣に迷い、考えたことはない	適応	128	1.69	1.30	n.s.
	不適応	24	1.75	1.15	
問31 自分の内面に感じるものを言葉にして表現する何らかの努力（語る／書くなど）を、これまでにしてきた	適応	128	3.28	1.31	n.s.
	不適応	24	3.33	1.43	

問25	今のキャンパスライフをどうしたら充実することができるかを、必要に応じて考えたり相談したりできる	適応	128	3.55	1.17	*
		不適応	24	2.96	1.43	
<現実的で適応的な目標追求>						
問35	将来の進路や、現在のキャンパスライフを充実させるための現実的な目標を、自主的に設定できる	適応	128	3.52	1.03	**
		不適応	24	2.79	1.28	
問11	自主的に目標を設定し、その達成や実現のために、現実 に即して計画し、行動できる	適応	128	3.42	1.05	n.s.
		不適応	24	2.96	1.12	
問13	自分で定めた目標の達成に必要な場合には、世間体や見 栄に縛られないようにつとめ、時にはそれらを捨てるこ とができる	適応	128	2.93	1.03	n.s.
		不適応	24	3.25	1.26	
問19	目標を達成するために必要な場合には、他にやりたいこ とを我慢することができる	適応	128	3.50	0.96	n.s.
		不適応	24	3.21	1.28	
問5	目標を達成するために必要な手段を、積極的に考えたり、 調べたりすることができる	適応	128	3.78	0.87	n.s.
		不適応	24	3.58	1.14	
<時間的展望、希望・充実感>						
問18	社会的に肯定された役割への、自覚と責任感をもって、 生きていきたいと思う	適応	128	3.90	4	n.s.
		不適応	24	4.0	0.93	
					1.12	
問23	大学を出た後どうしたいか、目標と希望を抱いて学んで いる	適応	128	3.66	1.23	*
		不適応	24	3.08	1.35	
問26	将来に希望を持ち、自分は将来どうありたいかを考え、 それに向かって努力している	適応	128	3.59	1.09	*
		不適応	24	2.96	1.16	
問32	自分にあったよい職業とは何かを、まじめに考えること ができる	適応	128	3.71	1.01	n.s.
		不適応	24	3.42	1.32	
<時間的展望・過去受容>						
問27	今の自分は本当の自分ではないような気がする	適応	128	2.20	1.20	n.s.
		不適応	24	3.33	1.31	
問8	自分の過去の良かったことも良くなかったことも、受け 入れることができる	適応	128	3.85	1.09	n.s.
		不適応	24	3.54	1.06	
問17	過去のことは考えたり、思い出したりしたくない	適応	128	2.15	1.10	*
		不適応	24	2.67	1.24	
問37	やり直したい過去があっても、「それは現在の努力と将 来への希望に繋げるしか解決の方法はない」と考えるこ とができる	適応	128	3.58	1.06	*
		不適応	24	3.08	1.35	
<閉じこもり、現実逃避>						
問3	自分の部屋に一人で閉じこもって、空想の世界にひたっ て何時間も過ごしてしまうことがある	適応	128	2.21	1.19	n.s.
		不適応	24	3.38	1.41	
問12	自分がこういう人間であればなあと、いつまでも長い間、 空想することがある	適応	128	2.87	1.26	**
		不適応	24	3.79	1.32	
問21	現実から目をそらして、空想の世界に没頭してしまう傾 向がある	適応	128	2.31	1.18	*
		不適応	24	3.13	1.51	
問6	これから行おうとしている自分の行動の結果を正しく予 測できる	適応	128	3.30	0.93	*
		不適応	24	2.83	1.24	
<不安、悩みへの対処>						
問20	健康な人間は不満や不安とは無縁であると考えてる	適応	128	1.67	1.07	n.s.
		不適応	24	2.08	1.44	

問29	不満や不安を抱えながらも、勉強や仕事を完成させることができる	適応	128	3.43	0.99	n.s.
		不適応	24	3.00	1.06	
問33	スポーツに打ち込んだり、趣味を楽しむことで不満や不安を乗り越えることができる	適応	128	3.82	1.13	n.s.
		不適応	24	3.38	1.50	
問34	「悩むことは辛いかもしれないが異常なことではなく、心の成長のために必要なことだ」と感じることが出来る	適応	128	4.18	0.91	n.s.
		不適応	24	3.96	1.23	
<生活の自律性>						
問2	清潔なものを身につけ、身体の清潔を心がけている	適応	128	4.31	0.80	n.s.
		不適応	24	4.04	1.16	
問9	自室を掃除するなど、生活環境の整頓を心がけている	適応	128	3.93	1.13	**
		不適応	24	3.25	1.26	
問24	小遣い、奨学金、アルバイト代などの月々決まった収入を、自分で計画的に管理できている	適応	128	3.70	1.22	n.s.
		不適応	24	3.46	1.28	
問14	自らの心身の健康を適切に管理している	適応	128	3.71	0.99	n.s.
		不適応	24	3.33	1.13	
<歴史・文化・政治・環境への関心>						
問7	自分達の住んでいる地域や地球の環境、日本と諸外国の歴史・文化・政治に関心を持っている	適応	128	3.59	1.07	n.s.
		不適応	24	3.25	1.29	
問22	日本や諸外国の歴史や文化に関する本を読むことがある	適応	128	2.53	1.34	n.s.
		不適応	24	2.67	1.63	
問36	新聞を読んだりニュースを聞いたりして、政治・経済・社会の動向に注意を払っている。	適応	128	3.30	1.24	n.s.
		不適応	24	3.54	1.50	
問30	自分は地域社会の一員であるという責任感を自覚している	適応	128	3.16	1.07	*
		不適応	24	2.58	1.18	
問4	大学での学業に、興味ややりがいを感じている	適応	128	3.57	1.10	*
		不適応	24	3.04	1.08	
問16	自発的に予習や復習をする	適応	128	2.90	1.10	n.s.
		不適応	24	2.71	1.30	
問28	自発的に学業に関する本を読んだりして、自分の知識を豊かにしようとつとめている	適応	128	3.16	1.20	n.s.
		不適応	24	3.00	1.32	

4. まとめ

調査1と調査2の結果から、登校している学生のうち15-20%の学生が不適応状態を感じていることが伺える。

大学生生活への適応状況に影響を与える要因とその関係をモデル化するために、実施すべき研究ステップは次のとおりである。

まず、大学生生活への適応状況に影響を与える要因として、1. 所属集団に適応しているかどうか、2. 閉じこもり傾向があるかどうか、3. 実際に他者に対して必要な自己主張ができるか、4. 希望のある将来展望を持っているか、5. 過去受容ができていないか、6. 社会的責任を自覚して学びがいを感じているか、の6つがあげられる。ただし、それぞれについて項目数が少ないものもあるので、信頼性のある尺度を構成する必要がある。

その上で、それぞれの要因の間にはどのような因果関係があるのかをモデル化する必要がある。これらの要因のそれぞれが直接、大学生生活への適応状況に影響するというモデルと、所

属集団への適応と学びがいが直接影響し、他の要因は間接的な影響である可能性もある。尺度を構成した後に、共分散構造分析を実施し、モデルの適合性を確認しなければならない。

引用文献

- 小林正信・西垣順子・相澤徹・橋本功 2003 メンタル・ヘルス相談事例から見る学生の抱える諸問題, 信州大学教育システム研究開発センター紀要, 第9号, pp.119-132.
- 西垣順子・小林正信・相澤徹・橋本功 2003 学生の人格発達と学習に関する調査報告—調査用紙の作成—, 信州大学教育システム研究開発センター紀要, 第9号, pp.133-139.

資料1 調査回答者数(人)

		少人数集団への適応			大学生としての自覚		
		性別			性別		
学部		女性	男性	合計	女性	男性	合計
人文	1年生	8	4	12	9	1	10
	2年生	2	1	3	1	1	2
	3年生	1	0	1	5	3	8
	合計	11	5	16	15	5	20
教育	1年生	13	5	18	10	7	17
	2年生	6	4	10	4	1	5
	3年生	11	2	13	2	1	3
	合計	30	11	41	16	9	25
経済	1年生	3	3	6	2	1	3
	2年生	2	1	3	2	2	4
	3年生	0	2	2	1	0	1
	合計	5	6	11	5	3	8
理学	1年生	4	10	14	3	10	13
	2年生	0	3	3	1	2	3
	3年生	0	4	4	1	4	5
	合計	4	17	21	5	16	21
医学	1年生	1	2	3	1	3	4
	3年生	2	0	2	0	2	2
	合計	3	2	5	1	5	6
工学	1年生	5	15	20	2	15	17
	2年生	3	4	7	1	7	8
	3年生	1	3	4	0	6	6
	合計	9	22	31	3	28	31
農学	1年生	4	2	6	6	7	13
	2年生	6	1	7	1	1	2

	3年生	2	1	3	1	2	3
	合計	12	4	16	8	10	18
繊維	1年生	9	10	19	8	4	12
	2年生	2	6	8	2	5	7
	3年生	0	1	1	0	4	4
	合計	11	17	28	10	13	23